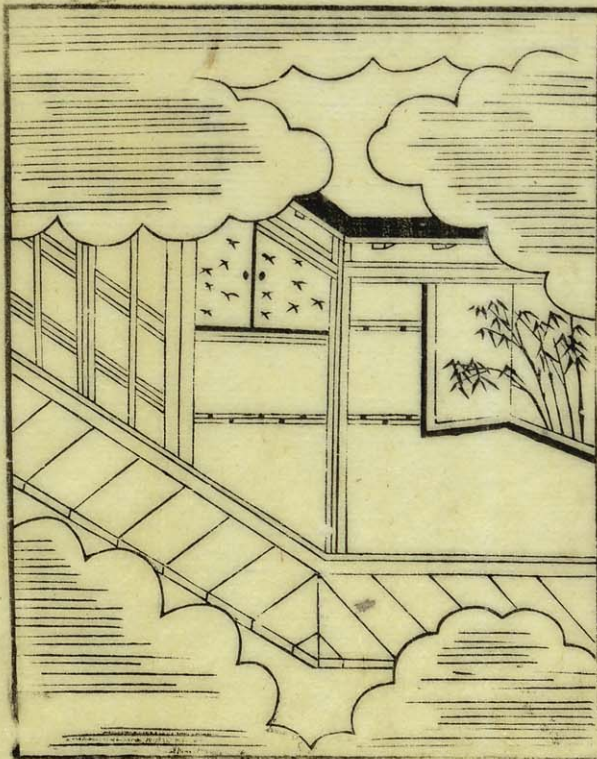


古今著聞集

十五

2131



古今卷七

〇又二



そしありきり西郷の如きもめんと見たりといふれも
是れも亦も子目とてなけりされがまゝのいふま
香の露田は上程のれはよつたはく日人よんせり
まきりそしあがりいひのあつて人んはなせり
ふりありたてられひてきよ下よわもあつてこの
かり人るよりありては香の成まよりりかえわれ
透物よかれの之まじりゆゑさりゆれぬ香を
まてんよえちりせりひてくる者もきりその耐
西郷の如くくのみり人ふあひく其今のまをたはる
事まじりもたがれもハ洋のれ西郷とてあつてい

古今卷二十

とりくひく教威はわづらひてしりていひぬしり
くりていひたまはれ事まじりかきそハは西郷さりの
ぬつらん是つどやせいでいも希きままやたはせ
教威まがふのまじりてい富をくりせしづみゆりけ
香のまてえありくびりまが参りまがされぬ教威のそ
まかりら件の男共されく西郷成始りせりす
あめくくくとりくひくありきり南友の地れけい
あつてん集そあかるに出陣の後地すすああはなれ
ハ奥あつまりうづびりするに香もよりきけわを
てどり別たある程はとりてわがりきりされぬ

どりうひてかり清門よりそと若くゆや
一節もゆへに先一とられんればさるのみご後
舞あてのみまげうねるは母が振舞とて後小次舞
づつとまろひゆ人ものゆへありゆりて今とま
せゆらねまろひゆ人ものゆへありゆりて今とま
れ迷物あてゆえとまをねが敷威とあはじとて下
何よりあつるゆへとまをねが敷威とあはじとて下
に信流虫ひらの船より座敷回園かきとまをりけ
きゆひらの挨拶を年といふを年へとまをね
小のわづらひのつと

古今卷三十

湯堂の儀同三目の車小のりて居てゆわりまわり
きたるに建原のいさよとらきり亦成半孫よりく
と成てゆき成威をさせ居ひくは半ハツくより
おこころきりそとくわたりされまきバ儀同三目こま
我蘭へんれ補給よまのせとりまをねと人のこびる
中あふりまきりまきり湯堂孫よりくせ居ひく湯車
と先りせえぞならあくとくせ居るる神物と悲
させ居ひくゆへあり
越後のあしきくゆへは法苑持若れ借恒
物々備りきり小二の孫よりて神物と悲



古今卷下

〇又四



親^{おや}をいへていへていへば親とていへんがふふ今尚
由の身小伊^{おん}とていへばわりのむり此孫のゆきま
かへ孫のちうとふうりて有証をさうとて何^{なに}ま
二千部と書多りあるいふとてわりあふふうさ
うううあわの原

わりの男目^めのれくのち^ち若^{わか}の天^{あま}の海^{うみ}と海^{うみ}の海^{うみ}を
いへぬ^い女^め人^{ひと}わひうりて男^{おとこ}うりてううらふふそ
と^とか^かま^まま^まり^りを^をま^まに^にい^いひ^ひく^くら^らの^の海^{うみ}う^うり^りて^てい^いふ
も^もん^んの^のぐ^ぐん^んく^くも^もま^まり^りを^をれ^れん^んま^ま海^{うみ}ぶ^ぶう^うう^うひ
ち^ちう^うり^りて^て交^ま通^{つう}と^とま^まん^んと^とま^まれ^れん^ん女^めれ^れい^いく^くう^うの^の原

古今卷二十

ふ^ふか^かり^りぬ^ぬま^まぶ^ぶう^うら^らま^まけ^けま^まり^りん^んの^のか^かれ^れけ^けま^まの^の
け^けそ^そわ^わく^くと^とう^うね^ねぶ^ぶい^いよ^よあ^あぶ^ぶと^とい^いひ^ひく^くま^まら^ら
ね^ねと^とあ^あま^まの^のま^まを^をお^おゆ^ゆえ^えう^うて^てね^ねあ^あね^ねら^らふ
い^いふ^ふ女^めせん^んと^とね^ねく^くお^おわ^わく^くう^うま^まで^で孫^{まご}へ^へう^うの^の作^し
あ^あい^いま^まれ^れだ^だい^いあ^あみ^みと^とう^うら^らぶ^ぶら^られ^れ命^{いのち}に^にい^いふ
と^とり^りて^て作^しま^まん^んは^はま^まと^とい^いは^はく^くあ^あま^まと^とい^いは^はく^くわ^わ
ま^まと^とお^おゆ^ゆえ^えい^いわ^わく^くあ^あま^まは^は元^{もと}理^りと^とう^うの^の信^{しん}言^{ごん}して
さ^さや^やひ^ひま^まと^とい^いひ^ひく^くう^うら^らま^まけ^けれ^れん^ん男^{おとこ}う^う
の^のゆ^ゆい^いわ^われ^れと^とや^やお^おひ^ひま^まん^んと^とく^くわ^わい^いと^とい^いて^てさ^さ
あ^あと^とす^すく^くう^うう^うら^らひ^ひわ^わく^くと^とあ^あま^まと^とい^いふ^ふま^まり^りの^の原

りさそ帯をわけがたかりをばだ女あさつらま
とて男れ弱あ流しなくいあつらつら半の川
更にわく流は男あわりのたつたそのあつらとて
おぼさく武徳屋のわりの流足居つてせいのくわ
くれぬ男河よに武徳屋よりくれば一の流を
おりてよおぼさく流くゆり男あつらつら半
半一う流りあつ七日よに流花理一神と書つら
一てせあつひたり七日月あわつら夜のまよげぬか
天如よ團遠せくきてくつていしく日れ一宗れあ
りあつらて今物利天ふむまうなりとほきて

古今卷二十

ゆり小ざり はあつらり流花理

山城由久世勢よ人れむまあまきりあつらつら
親着よつらかりあつらつらつらつらつらつら
人つあそあてつらまんとしきつら流足てあつらつら
ざりてまおらつらつらつらつらつらつらつら
おゆつらつらつらつらつらつらつらつらつら
あつらつらつらつらつらつらつらつらつら
くつらつらつらつらつらつらつらつらつら
きりつらつらつらつらつらつらつらつら
うけつらつらつらつらつらつらつらつら

より船を幸成のひつろおつからあてしゆくお母へお
中くし平しきとむひなり梅津の御殿にお入ぬれ
いせやあ介のあつらひに依位のまがさきつ男へお入り今
船の御座るそふりて事つらうしとの中まごそ縁
わさ海くく御も度うなりけしゆといひつこわたりて
こあ之自と居て事久しは江波のひえんは御座ぬじとあ
事とあくさざりてあに江に種あやむゆくわさあては
きつたりあ之自と居て事久しはひきりやのころお
くれくつりいひまあれくきわく御座とありく其の
何うかといひあがりて尾張をりてまごんとた記さる

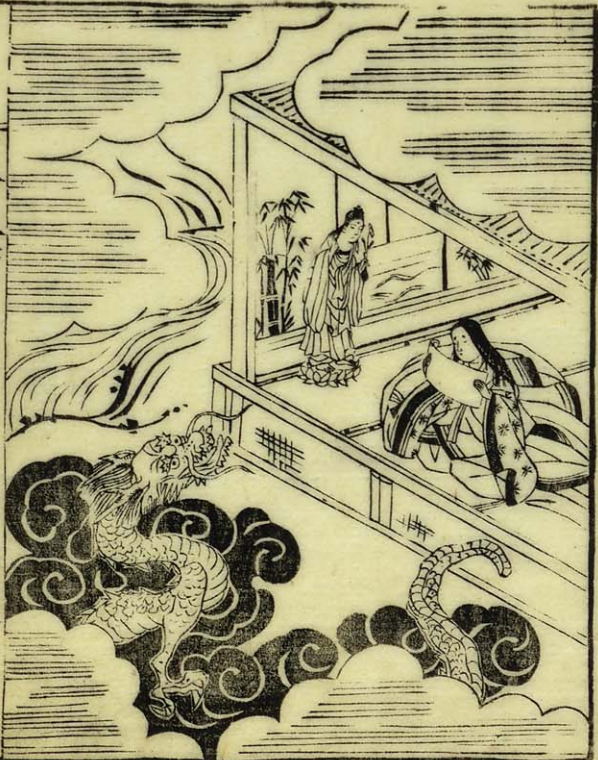
古今卷二十

あれ御座ぬいやくおそむおなごせんこけしゆお
て親あつらひとふまきくわたりおあけし御座るくりよ
興りて百千れくおわ御りては地とまごよしとま物
てうたひ又御座事位かあてて親あか護と居る
おふりあつらひ又御座事位とさるて一夜親あつらひまき
他念わりく念し入りておあつらひ一尺許り親あ
ごんせき御座ぬく御座事位とさるけしゆとさるを
はむとあせりしりの親あつらひのみきて十八日とくに持世
とおんま御座十二日とりのいふ御座事位と御座事位と
ざりて法方御とらひおけりて御座事位とらひまき



古今卷子

〇三八



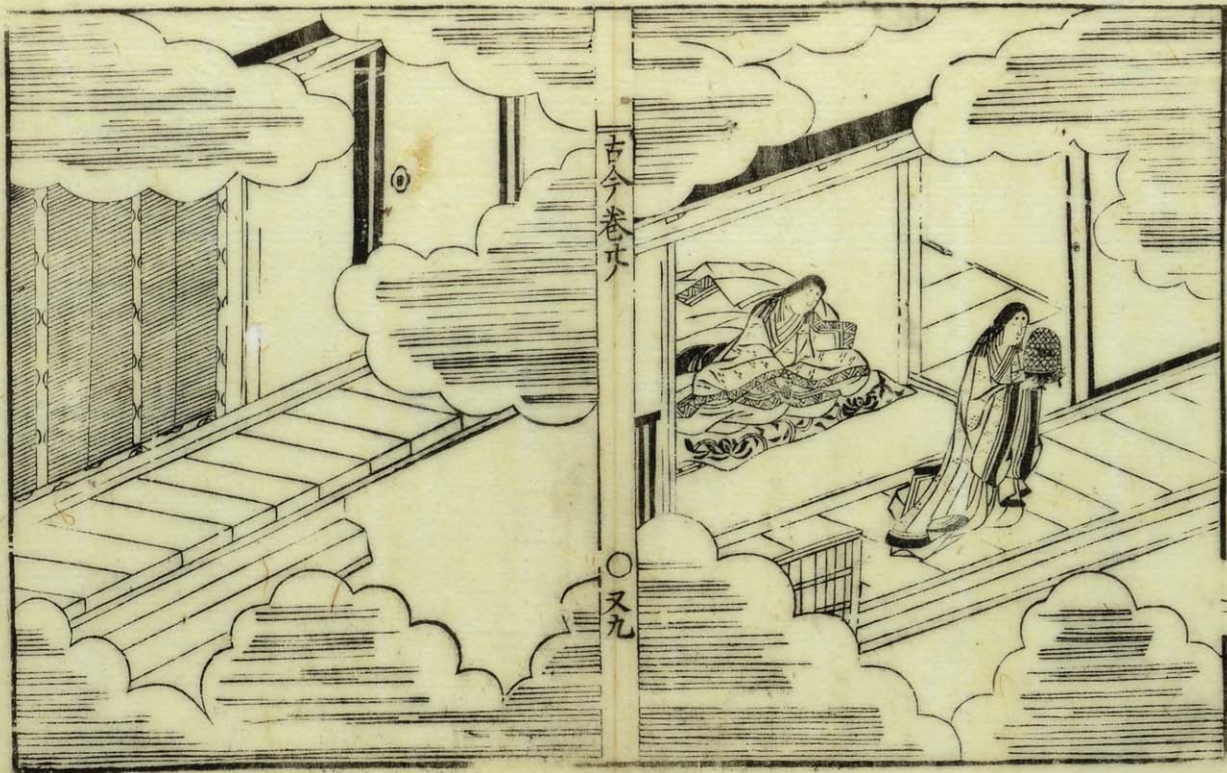
うしつひとねんぬ

寛政八年十月廿五日辰上人西丸勝と小舎人なるはくら
下小舎人おしむをりまわりのうまひを下之位にお
むりぞきあらわれける辰上人は方中ね仲実お
た方中ね申通船下甚れ袖もみ冬掛装とてま
うりまをた揚て辰上おきありて朗誦今福様おなり
とまをりたいたれ逆らりまをり小舎人海は辰上人
せしきわをり ちりらるらに記ある

嘉永二年八月十二日辰上のたのこは浪海種より
むりやくひげをたもむごころのみこのりわりて

古今卷三

ひつぎの糸あてうけぬらまの巻て下されうりまをれど
書面以下これなる棄のゆきまのりてむりひまを
辰上人時危されてぬれまをりまの御侍は辰上人
とて代たたる仲中よりうりて僮僕とらして申候
とせまをり十倉所申候とのくまよりまをりあは
せしきまをりゆきまをりまをりまをりまをりまをり
内書つりまをり孫女帯おなごも鏡あひまをり
ありまをり申文のゆきまをりまをりまをりまをり
朗誦誦をくまをりまをりまをりまをりまをり
まをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり



古今卷下

〇又九

せり筆しり

同二年冬のころ貞守宗季とありては御法
候うをせりするに候て尾やどくまふれき
のゆえ似ざりせり是候事どもつこありせり人の
飼よりき候もそ人いわけけくうせり候り
ふいそんじふされ候より先ゆきされども糸
うせざりせり

偽延のころ宰相おせりせり人の乳母描とくひ
きりその描たる二尺ちうこれつとて網とせり
これに付ねぐ半とせりてとねりちひろ十歳

古今卷三十一

ふわありせり付ね入くはけまぐせありに光を
乳母つひふせ候にむひてなんが志ねん時とまよ
んをべう原とせりふゆいゆねあゆへうあつら
る事一十七ふゆを原年ゆへに候と原とせり
きんともぞ

ありきふまふの候し只描とくもせぬひま
その描候どもと先かて候事れどもわえ
ふのゆりせり人れまふてとあらき候ゆに
袖とせり

久末は毛生う候事候あまの人知是候

せりり甲三守なりとよ青魚の毛むひり
あかこすまをよりの瑞穂とぞけこありきりうら花
府んせもひるりけりけりけりあてはけり
御しきか

後白河院の四時を忠尉康徳とのさりのゆせり三葉
鳥丸鹿れ多乳の取らせありあへにあはれはなほ
らなりおとこの大の異神を御座候よりとせりある者
れあま康徳院中より神作のあはれけり物くしては
大ふかりけり中見けりける河られぬ

兼安二年又月二日东山仙洞より結念れまありきり

古今卷二十

三つは後信位と下れ北面の事つひに神作のりあま
たふはとくこれ方歌内流次親伝わたり方歌右近
中流定振物より前承慶後九葉よわたりて此を一
面と現くみまはを地の巻れとて一歎及とせしとびく
ありとよよ作の男本とくく意後よ用之作巻
とまこりまうこ八人半とくまじりて花をせむすびく
りまこり密河の南ふまの鶴巻とありまよま振鶴
と今くまのり座れ東の初ます一團あわたりて
の花巻とまてく揚負れ巻とくまよま降れ巻座
とまてく大敷証報とてのり座の良小盧檣樹依

信よりてうへりの同水新女の舊蔵とつくりて人まじり
 牡丹款冬をいひはかりてうへりた方此令人は前より
 集集とた方令人の蓮花玉佛は甚とまじりてその
 く皆未の儀列系と西南の門より令くあすま
 事よりをりた。三六のわつた方野中ね定
 猶ねり事具と海よりを参とすわつらほ中と出
 所ありて人成多の檀中并理房ねりおほい成て
 てもくもむじりさういひおほとも後ほおひおれ
 中門のわよりよりまより先の方令人を産治とた方
 令人を中門を入く事とのわひさのり事とた方

古今巻三十一

竹屋とほりて志未の屋小敷く春日まうざり
 誰より新源中細言栢子とててま自ある由量れ出
 わとやまのまうまふ志中ね定ねりト尊集とくた
 お雅賢とねりて浮比府の居人二人豊陸中ねりたか
 らぶれねり人助もりり又隣は信綱も内くほりり
 左志依基花備河とく令人中雅賢ねり基花ねり
 ねりねり人久やまの雲来ねりて志進とく人久やまねりた
 いかしねり令人小志依の隣ねり志の歌ねりた
 言伴もねりねりねりねりねりねりねりねりねり
 ねりねりねりねりねりねりねりねりねりねり

市史をれと人春豪房伊勢酒のししれうと人海人
しぬりてとれをりぬん移ひくわれをぬなととれ
雲とりてゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
ありひく輝し多ひ海舟の着ふとぬりおぬわつ
まうりてとれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
の船ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
博覧ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
て又ま若の男ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
うかーれととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
啼位しとれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ

古今卷二十

主のたけの身と市は雲ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
雲とりてとれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
ありひく輝し多ひ海舟の着ふとぬりおぬわつ
まうりてとれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
の船ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
博覧ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
て又ま若の男ととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
うかーれととれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ
啼位しとれゆふのまうれととれゆーれ切通つとれ

つぎへまがうすの汁まに毒虫をそれをおぼりか
いんやあか小あひくそやうねの武勇とあこむん
まよりれくまよりけづきこし

源をよむ性ゆれ堂ありあつ師をぞいあかの源三はあ
うけあがは総れはまといつあ馬九が附は書と能記
くろたりやあけらまきあてまきるが年久しうかうて
れ朽てうりてゆ々ろ源あさうんそくろ源れあか
て物きるれたあろくりあしまきりゆ々ろまきりま
あゆとわろし打小打付く年法もてまきもせま
てわりきるへし附は堂建立れ年記とりをわいた

古今卷三十

六十余年小かりおきりそののりく打つけまきあ
らまそくまきる命ながさを結しと事こま地
まきるまこの裏板いわがうまがとまら源あまや
うてまうめまきりまきりいんあわゆるあが門の
まの海うりくりけあが強りまら

或國陰人あよしてゆ々ろが常えあなむら
てあよりまらたこびのうゆりまら源まざりこれだ
あかの白虫れあいつまかりまらまらと何まき
橋かまねまらまらとあまきづりうけてまはは
とあてまらまらねまらまらあひくまらまら

ては編むる猿のくちりくみわたりはがしりわりの
後のわいとつゝさきり猿狩もつゝうげ死んでる
てわれど馬は骨みつゝさてうみのかりて目せじ
らんゝさる付猿馬の馬はなてささわがのにたり
そ付流の猿二支如事ありそ是れがうけ持てくすれ
ゆふ付そざり馬をぶらんとすれはくねりは梅がて
川をわけて馬は水はちげぬくぐれたてれて一
支の今二支ハ川上より與よりきんくの鶴つみ
さるはさて與はさせんそちけりあや脚さあが馬
よりつりささ馬ハ水はちげぬくさされともあさ

古今卷三

ちうそああくされど猿ハ打すてくさへあさり
あささかりしきりまものわたり見たりしそを刺
上人よりさるる
そは常陸の郡よて人れよへさるり大なる
猿さうひかりさるの上人如法理かんそさうそを
と解て林法よささり付この猿はじゆひのえんんら
人ありせんき程の太形は脚水をひりてさる畜生
のあさりしといひのぬくといひさるされば猿うらま
て何ともあひん思はれそさうそたてさる人なり
うてそを救猿をせみざり物よそとひれれす

引方とあらびとやべ孫他の初へひてざり義人
たりやふ白帯毛りりるる成りひくるる成中世
らでんのふとねまそそざりひつらひてうたつりせ
ん下腐のあつておしといふ布を冠とあててぬせ
揃まうてあそぶとぞおんさうりさるるそらにむ
のりへびび里れ許へりさるるね 退て暮る
孫のふとんはなそ人ぶされの山はそとお中をそ成
まされいさねりみあひんとま回されど山はそ
と神の中とそそはみ中旅量との毛はるはのり
てりのまてとあそぶれどそらまうりて退てりま

古今卷二十

と申するまのこざりまらさほまは海ひびりれり
はまうとまつあそそ何さうのあんひびりれり
てさぬてよそとたとそそまらあしうとま退てま
そり上人はひき海わりのまそにんが先よりあつて
孫とんせをたれとるねりくねれりうとあてらんか
てうぶるま一孫とそ書はまふと女法師の助成
のあそびとていへり海やとそははたままして人倫
れ者もそかたり孫孫とそまうつとざんをみやうに
はるは法師は孫もまらべとていひくうりままかり
あそびるそねりてびりあまうとそあひくりにあ

どゆきうくその様足らじとてかたうり人けりい
事ハ畠山彦司波痛がうこれ事代もふりん
信也家 七代仁二年壬戌年

建儀の比おゆ縁流川をけまぬまぬまをり傷せけりて
登のまへ月出流くさえて指よりをり月三足津流地事
まゝぬれまかり孫すゝの空へ入るをりおむそりく
おひくいつせまうとせくる雨は涙のり女まりをりよ
是しお家事くそまのまうたきひりしとてやどを
中くべ女何りおそれおむいとおもく志てぬんを傷
のあえうり流穴のらりようん入ぬへうりおの洞を

古今卷三十一

いざとていひゆあんといふゆとれといひまうようりさ
あ湯を元の早ふらと入うりする程よあふたから地
おくびりくともひらぬれと中そ死ぬりくこと入
てんせんかんれいりべせんえとそくきりを流貝の赤の
内斗まを湯をまへとせと入つる女極小産知くわ
あつやぐおあさのりの流ぬくおむびり陰をんを
らびくいのりせふにららぬれ靈之病ふにあふ
まそいいたいのり夫くあまがうた移りて日くひり
このおまれつるまえがうたをんり身とてせうのん
とせと産よといひ入る何のらりまればより助た

せいのをうけてよが命をばあつるぞといひて奮て
ざりあゆしてざりとも者城足まごらりあこのやける
よたらうたいでれやあれうをりをも別まじ取もやそゆ
ららあこのやうきさりしやどなりをうりやうれまの
ちぐく人のまをどさるへ

兼久正年の友たらし武田左衛門光隆河本河さあ
れすをあて物せしをりよむむと藤と河仲へ追おて
あふふ村ざりるよ三足とこは三足とびのせざりは
てざりをも藤とあはゆりていせ藤とつあさてま
あふあまうるうゆたあうりまのた一足の藤死する

藤とゆいしくゆをりてま藤よひやせいぶた分やうけ
おも死よざりそのがあまごめてまをるあしくびん
なりまのまへ百人よて武田がわがかりあのを物
ふがせくきてゆさうりくんは区とそあはにこ
又因め帝位のふたが物せしをりたた藤と足ふり
追のせせいでとあえんとあをるよま藤ゆびせうて
物を取しる神かみへ人の城はあやしてさうあも
村あろさでまがうんあうるにたあさうりまゆひは区
とれだまゆびされくまへあやりて足まがたあわ
藤一足あうりまの藤とあてまをあやせうて

後山をれどよみくつくりあり

いととん山をれどもおつたに松風

おひの神さめ又おつくとく

おあいらつうひもつてさうまをりさあ
くーわりをんりたごてあるがー

二条中納言宣室にいづれを松蔭にれり
とつらとてうとつたり

いづれは海あうまーといふはさそ

ひりてこれら何れおくら舞

後山川地山傍の時雨下人赤重丹波山原の

古今卷二十

〇三十五

出願修術備をのあめにさうりさう時くつた
くりやよ山ありその山よつさび多くおひあはは
孤はくあまゆくりをり或山がーれをさる二人
してりさうさる小件の山よいやさといふ地あり
さう三天あまり汁さあらひとそくけ二人の
おありて大はあさそえのまんをさりさそだま
さびくおげくおたかさをさ事おさうりおていた
ものうらぶさうはあさそふらりれまさをりわよ
校のまさをれおむじりいりおがーいりりかおほえ
ひふび時らちかえりさそさうりおよりさり

代なりしてんねしきりゆきも地のをきくひ
きりきりきりきりや

をいも好耐物なりやま又代を思ひのわりの
まきりくぐんのてん思あけ毛なるたれらのた
とひたりびたす月十八日ホ七日月ホ三度いふ
も奥をれうひとらうりきり入わあきては
とくめたれたわらうりきりす月十八日わ
親書の海日かねて畜生かたんのわきでさも
ぬーホ七日ハ何れようくわふかおほつうぬ
もとうりくわんぬれびたのまごあさかりきり

古今卷二十

どうの段ア思が子息の小童うひそききりきり
くぐんの小童そのうとせよきりうの月忘ホ七日
あてききりう波目ぬれどてかりきりあわれ
あしきぬて佛菩薩の海日并よまをれ月忘
と日すきび思とほうする半人佛のゆめあり
どうれ半あてゆめいふひささ畜生のわく
きんくわりぐたはし

又廻中必之需那よなを耐平の改との小童のまきり
らりるたとうひたりが月の十五日よりおろび断
合とねんしきり奥鳥のうひはくさうり

物はつらざりせうあきもわごとや川の悲死せり
トもれもやうごふわりびとさま

仔細必別保くゆふ前形ア少捕忠盛頼トてう
うりきるに浦人目ごに網で引きりよわる目大
勇とうらへ人れやうあてまかしくといふ
うとよごらばはうめて後よにうりきりまはよ
のつひれ集まてまきると二唯のついでうりきると
二人してあひのうりきゆが尾をばつらまおほひれ
てざり人れらうよりきれたくおめく多人れと
一又あまご流あはれも人ふうらうばおごら流あまご

古今卷二十

二唯とば忠盛頼トれりやうりきり一唯と浦人
うりてざれに浦人をれ切らひてざりされあへく
こそおしそのわらうひしとれよりきるとぞ人異と
りああひあれてこの物あるや

みられらふ田村の御の任人ふんをふべしとるもむた
おぼつひもあがもなほせしとむおしくゆりきるふ
あらぬましといふあまよきも一ほひあさりきるはゆる
ととりとりといふりされどあやまごばおとりよあひ
おとざりもと一流あてそこあてざりひてえり
とばえざくあまよくあまうりぬま流のあま

いとふゆめさきつる女のちのさやうおつまつらうたにさ
さめくとほさめつらわやうして何人のくくおや
とゆきれだこのおわらぬまめてさるるわやゆりもゆ
ぬよさうぶられたこととありしはるるおしびよえ
どしてありてうきやうへびのふよりてよがぬも
まぐへゆまきこととて一巻の奇談を多くてどく
くへりぬきり

日づつれださきひし物張わらぬまの

まあとくこれのむらり経そらうい

わられぬうらうらふおらに中一日わらぬ後さう

古今卷二十

〇三十

とんきれだえぶくろまざりのきざりれうらぬのが
らゝぬつとさくぬさておらてまきりあれをみく
ぬふえやぐりらととと切ておらしてきりこのおら
前形やを捕仲徳カウチおらぬよ見ゆて

天福の比高上人のゆやまりらゆれ鴨とほあさ
りのききりすよとめはうけき九斤ツ自つおきえら
きりその鴨りぐらぬてばうせぬりぬれぬいぬ
りのぬすこるやんともとめぬききれぬも
足つととみ月斗みえは鴨ゆまおきりそのと
ふやうぬ付つらきりぬわやうとておてんきん

ういけん書よりきん

あつては母めつりわつてそとさる海

ここのうもとふー海の水

大津ののあめれりつる月わりの石の大道と
とりきりたわつてわげおろそくつるこま
おりつるきりてお津法中よみゆる

あつてはつるこふそありよきれ

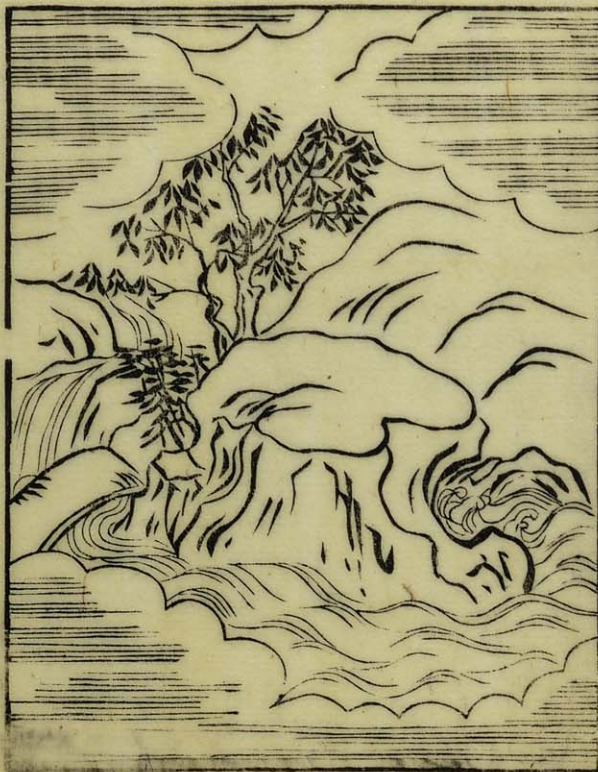
つらあけとわいふらん

足利なる入る義氏おつる若佐ゆり猿とまうきり
きりつるりのえもいとばまひつり入るお申れん

古今卷三十一

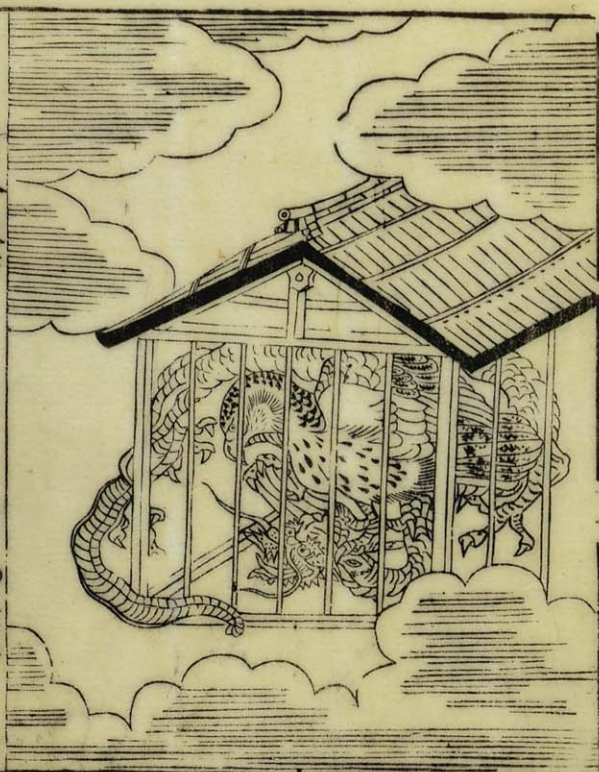
三十一

よつりたれど前徳のつる光村よつておせられ
まのせしききりよ誠よを無わつてあつてきり
きんらんこのひつてきこく海よまやまにまうせて
帽よとせつりきりこつたのどつたまひくと
さつめあせめあせをれば上下目録おとろして無
しきり年とそつるおつて徳とてしひつらとせ
ぬつりつるいんもおつりきりも無と事あつて
せつるおつて徳とてとせきり件の徳とて光
村あつりて事とてつる屋のおつてつる
みいりつるつりきんよせかつつらとれつら



古今卷三

〇又三



後藤もくもせうりきれぐ余をたむかざうね

そか^ばお主人を命入たとのふりのまきり男なりき
とれたつのは様を射きり或日山坂さうに大様を
とれどもあま追のせせていつりきりかたにせだ
りてきり政^まはあがりおらんとうきりうが何とやん
ねとあのまうたわくやうよすの所んをれんじぶら
なりきりせよあがさびをわびく地よおらんすれ
ごまざりとわひつり成つてけんそてまれまうり
もそんと志きりてこぶあ又母^かよつとそてんねま^ど
ちきりうくあびくまれれれ子ごあうつとせれ

古今卷三十一

むりあともみ地よあらみきりせれなりながく
後^かと射^ありつりせれあててきり

振^は渡^わ必^ひ後^ご志^し屋^やと云^いあまうづりなゆ地の耳^{みみ}あひ
ふか時^{とき}もわ祝^{いわ}して人^{ひと}成^{なり}やまきりえわふりの必
成^{なり}とせれじゆ地^ちおるると中^{なか}のそれ村^{むら}人^{ひと}口^{くち}をどら
てまげうくれたるねよ命^{いのち}入^{いれ}なを持^も監^{かん}をひりとうや
ひああらたのころ海^{うみ}うろと書^いきりある自^{みづか}地^ちひて
うりきりにまいのしくかれだ重^{おも}かたれぬうひせり
み地^ちの海^{うみ}うろ自^{みづか}とけてくい行^いく海^{うみ}うろとてう
あどわその毛^けとひええ地^ち小^こ圓^ま成^{なり}けくありきり

のやふひさうあてあわりささうに積尾よ申す
ての中よりあれども人の物もよかりし海を
いひまきバ戦の上人れあめをえし虎の上人れあ
とありぬさうさうが海をひきりしゆさうゆて
ひさく上人あひまてつゆとあはぬがらりさ
翁あくまをくく作かも上人おとすまがく心
まじりあまあがらぬ海をくくゆて今とあれ
作へしゆ上人をさすは本年はあやしくい
るのさぬあれどあひわをくあまわわれぬま
て堂次立坊と作り作長とてのやふひささう

古今巻二十

のまきりさうさうゆくゆさうさうさうさうさうさうさう
心きんのうらさゆさあささびるさあせれくさうさ
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あまさうさ今いまのまへ
白拍子しろはつしやとあまはまらぶあまわりのあまは阿の傳あのひ
くうさひあまわさあまら物神ものかみさうの者あさうさ
せんせんとゆさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
建けん長ちやう六年二月二日の夜又この傳あのああは命いのちあ
くさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
すのあはれはまさうさうさうさうさうさうさうさうさう

川に身をまかせたはびき物の中へ又まいた中事成
 すらんらへおれを物しくまへさればくひありあり
 せうもふたふた中事成らんらへんのけくうりう事
 つらんさんのはよわまきまぶらわめきせうありあ
 らんとすまいたのめくわつふえはけいけいせきども
 くまねりせう時よまうして刀切物えんらんらんれ
 口はなれてせうらえれくやてらんらんておぬえ後
 び備えんのはおとれくんもまねるえいわざる面神
 もおかりせう件のらんらんてお城川はねげしう
 されん系まうらべあ川まりんせう海とらやあ
 の

古今卷二十

〇三十九

中事とそのねよりかやえ座ぐえうせませう
 せうゆりおそらんきまへ

依（い）の（の）依（い）乃（の）右（みぎ）府（ふ）生（な）祭（まつり）方（かた）と（と）ふ（ふ）お（お）ら（ら）の（の）依（い）成（なり）を（を）止（と）
 人（ひと）よ（よ）ま（ま）の（の）せ（せ）う（う）と（と）ぬ（ぬ）き（き）ま（ま）は（は）わ（わ）げ（げ）き（き）う（う）ま（ま）せ（せ）ゆ（ゆ）り（り）
 の（の）ゆ（ゆ）き（き）と（と）あ（あ）ぐ（ぐ）ま（ま）の（の）依（い）成（なり）を（を）止（と）す（す）て（て）お（お）せ（せ）う（う）と（と）あ（あ）ぐ（ぐ）ま（ま）
 て（て）ゆ（ゆ）ら（ら）と（と）い（い）の（の）う（う）い（い）あ（あ）う（う）ふ（ふ）う（う）り（り）て（て）中（ちゆう）國（こく）河（が）若（わ）依（い）成（なり）
 奉（ほう）が（が）り（り）ま（ま）の（の）中（ちゆう）り（り）て（て）う（う）せ（せ）ゆ（ゆ）り（り）て（て）建（けん）治（ち）永（えい）年（ねん）十（じゅう）二（に）月（げつ）
 廿（にじゅう）日（にち）廿（にじゅう）日（にち）の（の）所（ところ）に（に）あ（あ）る（る）前（まえ）お（お）か（か）の（の）富（とみ）小（こ）
 治（ち）の（の）事（こと）より（より）幸（さい）なり（なり）て（て）永（えい）日（にち）一（いち）日（にち）内（うち）違（ちが）ふ（ふ）あり（あり）
 お（お）か（か）ら（ら）や（や）と（と）も（も）と（と）め（め）て（て）裁（さい）決（けつ）を（を）あ（あ）つ（つ）て（て）お（お）か（か）り（り）

是方つらねとそがねゆわわのうとやうふあそ
書てをうまつけくゆきり

まきよわちんをえん船のこやあさり

のつけこは代のこやとん船

たかよ又お房ふらりて櫻城ざんちにておねづ

むもびつせたり

すみと川をびくまりしとるを

々六雪井のうへよえんつう船

は半ふん直宿稱つてえんゆくかむらんとひて

尺ゆくぬれとえ

古今卷三十 ○三十六

都鳥芳名昔閑万里之跡アキナ徽禽ヒキ寄舂キチ

今遂一具イマ悉ツクを畏悦オソレ之餘ノチ謹述ツク心緒ココロ而已

前マヘ三河守ミカワノミカド部兼直上カチナラ

ありけりさゆはわひとゆすも川

まきよわちんをえん船のこやあさり

りありよ悦ウレ野とのおおとまきよわちんをえん船のこやあさり

うとまきよわちんをえん船のこやあさり

つひつせとまきよわちんをえん船のこやあさり

うとまきよわちんをえん船のこやあさり

まきよわちんをえん船のこやあさり

てつゆもねげうざりせりわやしをたりあねよあのさる
わがどきぬぢりてはわぬごづり暮小ぢりいとほり
がた事かれだまうとさうをたうらびどのかうね
えうらあぢべといひくもさもほらうくあしとむかく
てはるわぬさうひくさぬぐまつらちおたぬがみ
今いでさあひるふのりてあくたのうさてつたあり
てぞりさう人又おぢらうさあをたふたといひく
あしさうらば言ねお悔は守れりてき成あぬめ
きさるにぬのうらみさのゆさうのくぬりぬく軍よ
おてられぬよとりばたさかぢうくそぬふうりて

古今卷二十

いあうれりぬよぞれど斤もおぬさきん命いのぬさ
のがききりあきりいとさあ年ふひひつるふる唐
れ事ああ天のうらあまことあつせり

そのとせうしうんのふ
楚襄王晉國とらんぬ孫未教これをのさあて

いとせのく楡の木のうへは蟬のあぬのまんとすま
まうらみ蟻婦のどうさんくすのぬさくは蟻婦ま
婦とのとぬとりてうらま秀雀のどうさんくとぬせ
あふひ秀雀又蟻婦とのまもりてあまのあれ将よ
う成りく童子のどうさんとすりとあふひまをさふ
秀雀とのとぬとりてあは深谷うらみ路様のあ

文集詩六

木屑一篇ボクノカニイタニ頌記取イタキキ致身枚与不枚イタキキ間マ

とわのいそなり又イタキキ陸士衛リクシの文賦モノ

在木ヤリキ不カク枚フ之ノ質シツ 處トコロ鴈カニ令トモ善ニ鳴セ之ノ分ヘ

やくそりとり又イタキキ後ノチ原ノ葛ノ蔭ノがむゆい

昨日山中ケノ之ノ木ノ枝ノ取リ諸ノ已ニ今日庭前ケノ

之花ノ詞ノ慙ノ於ニ人ノ

び一篇ヒトけしハ會ノ歌ノの邦ノよ入リつとにわハいハちハかハ

二川の原ニれキきキきキきキ

あつ入リちハりハりハ

古今卷三十 〇三十九

伶人リョウジン助ノ元ノ府ノ役ノ懐ノ意ノの事ノ小ノうノりノたノをノ府ノのノ下ノ余ノ

めいノあノめノうノゆノびノ下ノ余ノうノのノ地ノ場ノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

とノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

うノらノいノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

こノんノのノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

のノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

こノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

大地ノをノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

くノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

それノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノのノまノじノゆノりノ

坐つる物ぐりせわ川久々く後より此をぬかぬ
しく上^{いさ}婦^このさびり〜れわとよりあさうくすきれぬと
よひのさびりく物へあむ物くさるわあり地の物
あそびびくくれあそびとてば書わつむつりて
世の字^し根^ねまげく森の蔭^{かげ}系^{けい}うげそひたり且こあり
あれそこそわぬさあゆつとぬま大いあり
よりうれ事をおしさ事もさる〜物さゆさすの
それゆつたとさるあさけ城の〜ゆさあせよ
よりて或ハあくの記^き録^{ろく}とさかひぬいとあくの掃^さ縁^{えん}
とぬのあのとぬるはあ月がとのとらゆさあり

古今卷二十

の〜つひわ〜さふひかのでづりれあ〜ひよつとて
あそびまきてばてまやのり〜あをさばさ〜あ
り〜る事も又あ〜くわの事もまじりてん
〜つあま神城ま〜らまを空て亦篇二十卷
とて巻^まれ〜〜よいつ〜その事^{こと}起^{おこ}との〜
つ〜よその物〜り〜とあ〜りせり建長六年十
月十六日とりのれ事あ〜と〜て竹^{たけ}斎^{さい}後^ご経^{けい}の
無^む常^{じょう}のり〜ゆせ〜川^{がわ}は^は某^{たが}あ^あの^のこれ^{これ}なりたれ
あよ〜りて白^{しろ}糸^{いと}乞^ぎ人^{にん}丸^{まる}廉^{れん}兼^{けん}武^ぶの^の盡^つ管^{かん}城^{じょう}
うけ〜く〜ま〜つ〜よあ〜くの^の供^{くわ}物^{ぶつ}とそあ〜又酒

葉菓のそはなまうくま川席よりともたて三千
 葉のうらぐさ并は物類一様とてみわくはに系折
 のまよわんせて昆侖の曲とてまよふははつと後す
 凱^ニ冬ハ来^ニ又字のあ^ニ次^ニハ^ニわ^ニあ^ニと後と凱^ニ
 ハ羽^ニ跡^ニ菊^ニ久^ニふ^ニあ^ニ紫^ニ寄^ニ露^ニ況^ニと^ニあ^ニ披^ニ後^ニ是^ニ
 朝^ニ花^ニの^ニあ^ニ辰^ニ令^ニ月^ニ以^ニよ^ニ恭^ニ山^ニ不^ニ讓^ニ土^ニ讓^ニ水^ニり
 今^ニ世^ニ俗^ニの^ニ白^ニお^ニ之^ニ事^ニと^ニ凡^ニ是^ニと^ニの^ニ人^ニと^ニ之^ニ
 と^ニと^ニく^ニび^ニニ^ニケ^ニレ^ニ野^ニ曲^ニの^ニ心^ニと^ニり^ニて^ニ竟^ニ喜^ニの^ニ負^ニ越^ニは^ニ
 り^ニの^ニ之^ニ波^ニは^ニ一^ニ獻^ニの^ニ益^ニ成^ニと^ニび^ニ二^ニ献^ニは^ニ算^ニの^ニ波^ニと^ニり
 三^ニ献^ニは^ニ野^ニ曲^ニあり^ニその^ニら^ニ教^ニ獻^ニは^ニと^ニり^ニふ^ニ冬^ニの^ニ歌
 あ^ニる^ニが^ニ一^ニれ^ニゆ^ニき^ニさ^ニら^ニ也^ニ

古今卷二十

ちうくわげぬぞて人々をこしの多幸收
 拾の功成とけく一節竟喜の儀とては今日れ綺
 あるが一れゆきさら也
 柞は集におひくは他つとゆりすへんある子孫の
 中には堅城とをむけて殿^無に知ととのあはれあ
 子孫よりへんび^無の^無神^無る^無す^無照^無景^無と^無如^無は^無
 さ若し但人よりして許^無あつ^無へ^無事^無は^無陰^無と^無思^無
 惟^無とい^無こと^無一^無織^無茶^無の^無圃^無と^無苦^無困^無の^無儀^無は^無と^無も^無ん
 は^無間^無あ^無ま^無と^無ゆる^無と^無べ^無一^無傳^無これ^無ら^無の^無越^無と^無は^無密^無麴^無
 則^無之^無非^無は^無何^無り^無も^無や^無は^無二十^無卷^無根^無前^無の^無縁^無と^無

ひるひるへしては八相御園の傍園とせん藤之
梨輓花し文佛様後記と教といふ信やい
ゆかり

建長六年十月十七日某後胡右筆
記之當時棟雲行々青嵐漠々滿
之殘菊黃紫交色小砌之小泉鴛鴦
雙翅閑庭之物是動我情者也

曆應二年十月十八日深六句之老筆
終二十帖之写功早且為休當時之徒

古今卷二十

〇四二終

然且為備後見方學也可秘藏々々

老菜門 在判

古今著聞集卷之二十終

文祿三庚午年正月寫板

明和七庚寅年三月寫板

人商橋筋乃臺町

柏系登清瀨門

大坂書林

日

河内登茂八

三都

江戸日本橋南壹丁目

同貳丁目

須原屋茂兵衛

同下谷池端仲町

山城屋佐兵衛

同今川橋南詰

岡村庄助

京三條通御幸町角

永樂屋東四郎

大阪心齋橋通北久太良町

吉野屋仁兵衛

同心齋橋通備後町

河内屋喜兵衛板

河内屋卯助行

發行

書肆